茨城大学教育実践研究19（2000），201－212

養護教諭養成課程における医学教育の実践的研究(1)

秋　坂　真　史

(2000年４月28日受理)

Practical Studies on Medical Education in Training Courses for School Nurse Teachers(1)

Masafumi Akisaka

キーワード：養護教諭，医学教育，養護教諭養成課程，大学生，アンケート調査

新しい時代に即した「養護教育」を考える一環として，養護教諭養成課程における医学教育についての基礎資料の一つを得ることを目的に，養護教諭養成課程の新入生36名を対象に医学教育への意識について調査し，その結果をまとめ，若干の考察を加えた。

その結果，養護教諭と医学教育に関する多彩な意見がみられた。医学に対する過大ともとれる期待感と共に，養護教諭の特質や本質は何かといった議論も含めて，新入生の段階からそのような議論に入り込み堂々と持論を展開する学生もみられ，また「医学」を受講すべき新入生たちの純粋な向学心と使命感の大きさを知り得て喜ばしく感じた。

養護教諭養成課程における医学教育に関する内容は古く，また新しい課題であるが，時代や社会情勢の変化による学生の意識と養護教育に期待あるいは要求されている内容の変革を考慮しながら，自らも変化していかねばならないものと思われる。

は　じ　め　に

近年は，学校における安全教育の問題にも一般住民の関心も高く，何か事故が起こったときに学校側の責任問題に発展することも多い。必然，事件事故がないように学校側としては，校内の安全管理に万全を期すような努力が求められ，実際かなり留意しているように見受けられれる。一方で，児童生徒の側でも，兄弟姉妹の数の少なさから自分にかけられた両親の期待をまともに感じとり，ときにかなりのストレスを感じている可能性があり，それが近年の心身症の増加に拍車をかけているとも考えられる。

他方で，社会的にも，少年の少年による殺人事件や小児や老人などの社会的弱者に対するイジメ

＊茨城大学教育学部教育保健（臨床医学）（Laboratory of Clinical Medicine, Faculty of Education, Ibaraki University）

や虐待といった風潮も生まれ，連日のごとく新聞やニュースを賑わせている。このような時代背景のなか，学校における唯一の医学看護学系の専門性を有する養護教諭と養護教諭養成教育（以下，養護教育）に求められるものは多い。

養護教諭養成課程における医学教育に関する内容は，養護教育が始まって以来の課題であるが，時代や学生の置かれる状況も変わり，養護教育に要求されている内容も変化していると思われる。そこで，新しい時代に即した養護教育を考える一環として，養護教諭養成課程における医学教育の在り方について検討しているが，本稿では特に「新入生の養護教諭養成課程における医学教育への意識」について調査し，その結果をまとめ若干の考察を加えた。

対象と方法

対象は，平成12年度に本学養護教諭養成課程に入学したばかりの新入生36名である。性別は全員が女性であった。

本課程では，１学年に専門科目として「臨床医学概論」の講義があるが，その最初の授業の際に，「養護教諭と医学教育」に関わるアンケート調査を行った。質問内容は，「養護教諭と医学」のテーマでの無記名による自由記述である。３部に分けて質問した。第１部は「養護教諭」という職務をどう把握しているかの視点，第２部は「医学」をどのように考えているかの視点，第３部は「養護教諭と医学」の関係をどうみているかの視点である。表中の回答は，順不同で，一部に複数回答もあった。なお表中□で囲んである語句は，キーワードと考えられたものである。

結果および考察

１．「養護教諭」という職務をどう把握しているか

これに関しては，次のように様々な視点が見出せた（表１）。

予想以上に多くの考え方が出たが，これらの回答の中には，一般的な養護教諭についてというよりも，自分自身に照らして述べた者もある。例えば，次のようなものである。

「今の自分には知識がない。処置が適切であるか自信がない」とするものである。すなわち，何か事が起こった際の「不安」が現場の養護教諭以外にも，大学生の時分から根強く存在する可能性があることが明らかになった。

表1　養護教諭の職務

項　　目	養護教諭の職務
学校にいるすべての人間の健康管理・学校の健康を守る児童や教職員の心身の健康に携わる最前線・学校全体の健康を支える義務がある人	12(33.3%)
病院側とも関わる仕事・学校と病院をつなぐ役割（連絡通路)・学校と病院の「パイプ役」	4(11.1%)
予防医学を子供たちに教えていく（実践していく）	3(8.33%)
学校の中で一番「医師や看護婦」に近い存在・「学校のお医者さん」・「学校社会の中における立派な医師」・子供にとっての「主治医」	6(16.6%)
医学的知識を身につけ，手当てや応急処置を行う唯一の職種	15(41.6%)
学校で医学の知識を一番持っている存在・学校の中で「医学のスペシャリスト」生徒にとって最も身近な医学を知る存在	8(22.2%)
医学が，その存在の基盤となる学校職種・人間の身体に関する医学の専門知識をもっている人	5(13.8%)
学校で子供の内面の成長を助ける役割を果たす	1(2.77%)
保健室は「小さな総合病院の院長」的存在。複数の科にまたがる「専門医師」的存在	2(5.55%)
病気の予防と精神的看護	1(2.77%)
児童生徒は，医学を身につけているからこそ頼りにする（アイデンティティ）児童の精神的依存・信頼される立場	1(2.77%)
心から健康になれるように心理的ケアを行う専門職種	3(8.33%)
生徒側からみて，頼れる存在としての「保健室の先生」	1(2.77%)
児童の健康増進をより深い部分から見つめる・気づき	1(2.77%)
校内で何か事故が起きても頼られ，また信頼されねばならない存在	1(2.77%)
児童や教職員と，病院の医師や看護婦との間に立ち，双方の立場を考えるコーディネーター	1(2.77%)
日頃から医学や健康に関する情報に敏感に反応し，常に自分や他者の心身の状況に興味を持ちどうしたら幸せに生きていけるかを考える人・健康情報の基地・人生教師	1(2.77%)

生徒にとって一番身近な医療者	1(2.77%)
病院よりも行きやすく，どんな悩みや相談でもできる場所にいる心理カウンセラー的な人・生徒の不安を取り除ける仕事	7(19.4%)
生徒から真っ先に信頼される教師	2(5.55%)
非常に医学に触れる機会が多い職業・最も医学に近い職業	1(2.77%)
医学的なことを生徒にわかるように説明する仕事・医学指導	1(2.77%)
健康に興味を持ち，自分の生について考えさせられる教師・生命教育	1(2.77%)
健康問題を介して生徒の一生を左右するかも知れない仕事・子供のいのちに最も影響	2(5.55%)
全校生徒と他教員の命を預かっている・いのちを預かる	2(5.55%)
生徒に対して「親しみを感じさせる人」・生徒の相談にのってくれる「優しい人」・母親的温かさ	2(5.55%)
学校で看護婦のように傷の手当をしたり，唯一医者のように症状にあった薬を出せる人・治療者	1(2.77%)
生徒が学校生活を健康で楽しくおくれるため，それを支える予防医学について学び，それに看護を結びつけていく仕事	1(2.77%)
児童や教職員の身体や心をサポートする存在・医学面でも身体な処置に加えて心理的な対応ができる・心身のサポーター	5(13.8%)
保健室に常駐し「心のオアシス」である保健室をあずかる人	2(5.55%)
救急車が来るまで生死を分ける適切な対応ができる人・職	1(2.77%)
いじめなどで悩む生徒や不登校の児童に対しても，教室とは違った空間の中で適切な対応をする人・できる職種	1(2.77%)
心の広さや知識の豊かさが必要・心と体の両面から問題解決ができる人・心理カウンセラーの役割を担う	4(11.1%)
医学を「武器」に学校で活躍する人	1(2.77%)
他教師とは異なる知識，つまり医学的知識を正しく理解し，実践する力を有する人	1(2.77%)
児童の心理を読み取ることができ，適切な処置のできる人	1(2.77%)

単位：人(%)

将来の自分は「学校の健康を守る」人間である，という意識は養護教諭養成課程におかれた学生の重要な認識の一つであろう。ここで，「生徒」でも単に「教職員」でもなく，「学校」全体の健康を守るという意識がある者もいることがわかった。生徒という「個々の人間」の健康を守るという意識をもつ者が多い一方で，教職員を含めた学校「全体」を視野に入れた自己認識である。意外ではあったが，殊勝で大切な観点であろう。

また「学校の中で一番医師に近い存在」という発想はなかなか面白い。児童生徒のみを対象にした学校における「医師」または「看護婦」というイメージを抱く者が多い。一方で，「教職員」という認識をしっかりともっている者もみられたことも特筆すべきであろう。

「予防医学」という観点に立った者も数名にみられたが，これはむしろ予想外であった。というのも従来の医学を考えると，一般的には「治療医学」のイメージを抱いてしかるべきで，若者であればなおのこと，医学イコール治療医学であると思われたからである。しかし，今後の医学の方向性を新聞やニュース・報道の中でしっかりと認識している結果だと思われる。ただし，この種の回答においては「予防医学を子供たちに教えていく」という積極的な回答が多かったが，本筋から言うと「予防医学」教育は「保健」教育に属するもので，「保健授業」との関連の中で考慮されるべきものであろう。したがって，これまでの養護教諭の職務内容を考えれば，「予防医学」ではなく「臨床医学」そのものを子供たちに「実践していく」要素の方が優勢であって，また周囲からもそのように見られていた，と考えられよう。

「いざという時の対応」や「応急処置を行う唯一の職種」など，救急場面を想定する者もかなりいた。これは15名（41.6％）を占め，最大多数である。微妙なニュアンスの異なる言葉で表現しても内容が本質的に同様なものを含めて考えれば，ほとんどすべての者が「応急の医学的対応」を挙げている。これは，理屈の上のみでなく，自分が義務教育や高等教育を通じて養護教諭の職務内容を垣間見たり，ときに自分自身が実際にクライエントになって関わりつつ，認識してきたのであろう。なかには，既に「学校には様々な子供がいる」というように保健室にやってくる（あるいは運ばれてくる）子供の医学的多様性を指摘する者もいた。

他方で，若者は教科書等から得た知識のみならず，直接的な経験から，多くのものを学ぶものである。ここでは，例えば「友人の突然死」という劇的な体験を経て「養護教諭の存在」を考え続けるようになった者もいた。しかしこの例の場合，受けた影響は人生においてむしろ「肯定的」なもので，これまで抱いていたイメージを覆されて，「非常に大切な分野」と高３時になって「痛感」したものである。否それだけでなく，おそらくこのことが学生の，養護教諭への進路に大きく影響を与えたであろう。本例は，それまで抱いていた養護教諭のイメージとして，「ケガの処置や気分の悪い子の応急処置と面倒だけ」見ればよいと思っていた，と述べている。このような自己認識から生まれてくるものの多くが，「医学についての深い知識が必要」という考え方である。

また，医師との違いはおおむね認識する一方で,「学校の医者」という意識も片隅にある。すなわち，「校内で何が起きても，頼られ，また信頼されねばならない存在」であるという意識である。しかし，ときにこの認識は本人にとって，重荷になり，あるいはまたストレスに発展する可能性を秘めていると思われる。

「心から健康になれるように心理的ケアが望めるような養護教諭になりたい」とする者も多いが，養護教諭の職務が「心理的ケア」のみで充足されるとは思われない。しっかりとした「身体面での」

ケアがあって初めて，安心して「心理的ケア」を任せられるのであろう。もちろん次のように比較的正しい認識を有している者もいる。「養護教諭は，医師でもないし看護婦でもないが，しっかりとした医学知識を習得していなければならない」。そして「児童に対して適切な判断と，良い応急処置が必要」ということになる。しかし，どういうものが「適切な判断」で，何が「良い応急処置」であるかという問題になると，必ずしも内容を正確に把握しているとは言い難い。

ただし，「医師免許はなくても養護教諭は医師に近いものがある」という考え方は，けっして大きな誤認ではないと思われる。初任者や赴任まもなく大規模校に慣れない養護教諭の幾名かは，自分の立場を評して「毎日が救急病院に当直するナース」のような気分に置かれているようで落ち着かないという者もいるくらいである。まだ実務経験のない大学１年生にして，既に頭の中ではその心情を的確に把握しているということであろう。

養護教諭には，心理学やカウンセリングも重要と，学生時代から認識している者もいる。また，ある回答者の学生は，「養護教諭は，生徒の病気，ケガの手当てや健康管理をする仕事」と思っていたため，「医学を学ぶ必要と言っても，狭い範囲で大丈夫」と考えていた。しかし「学校教育の抱えている諸問題を体験するにつれて考え直すようになり，拒食症や不登校（保健室登校）の友人と接しているうちに，教師や周囲の人間の在り方について考えるようになった」。そして，「生徒側からみて，頼れる存在としての『保健室の先生』が果たしている役割は非常に大きく広いものだと思うようになった」と，書いている。本来，「生徒の病気，ケガの手当てや健康管理をする仕事」ならば「医学の学習が狭い範囲で大丈夫」ということにはならず，むしろその逆であるはずであるから，本学生はすでにこの時点で医学・医療を誤認していると言えよう。しかし，もちろん本学生は，大学１年次のフレッシュマンである。その立場でおそらく自分の学生時代を通じて「学校教育の抱えている諸問題を考え直すように」なったと思われる。また「教師や周囲の人間の在り方について考えるようになった」と入学間もない現段階で述べているのであるから，教職志望者としては早熟にして，また有為な人材の可能性を感じざるを得ない。ちなみに本学生は，「医学の基礎を学んだ後はカウンセリングなども学んでいきたい」とも加えているが，本例のように「スクール・カウンセリング」に興味をもつ本コース在学生も少なくない。学校保健現場での臨床心理や心身医学の今後ますますの必要性を，学生たちは既に敏感に感じ取っているようである。

他方で次のような見解をもつ学生もいる。「体調を崩して保健室に来る生徒は不安も同時に持っているため，『医学の知識を一番持っている』養護教諭に身体と心の両面から楽にしてほしいと願っている」と考え，「そういう欲求に答えられる養護教諭になりたい」と希望する。同様に，「養護教諭は学校の中で『医学のスペシャリスト』でなければならない」という視点に立ち，「医学の内容は深いがそのすべてを理解していなければ，学校児童の健康を保つことはできない」と考えるわけである。その結果，「その土台となるのは，医学の知識であろう」となる。

２．「医学」をどのように考えているか

表２は「医学に対する考え方」についての結果である。

最も回答の多かった項目は，「正確な幅広い医学知識・該博な医学の知識と技術（内科的外科的）」を必要とするという内容のもので，９名（25.0％）を占めた。

次に多かったものは，「救急車が来るまでの生死を分ける適切な対応。緊急の対応。的確な処置

やアドバイス」で，6名（16.6%）を占めていた。「他教師とは異なる知識体系で，（保健室での）治療に必要」というものも，4名にみられた。その他は順不同で，以下の内容が来る。

上の「適切な応急処置」および後述の「病院側（医師や看護婦）との伝達・連絡業務」との関連から，「中途半端な学習は，いざという時に生徒の生死を左右しかねない」，したがって以上のことが「円滑にやれる知識と技術を身につけたい」という発想になる。「安全な学校生活を営むために予防法を教えることも大切」という「予防教育」の重要性を述べる者もいた。さらに「生徒の体調や安全を考える上で医学は一番大切な科目」とし，「基礎医学・臨床医学・予防医学のすべて，とくに臨床医学は必要」とする者もいる。

「予防法・予防医学を含む，あらゆる面で正確な多方面の医学知識と，ケガや救急に対する医療技術」を重要と考える者もいた。このような学生はしばしば，「生半可な医学知識や技術で対応してはならない」と慎重な者もみられ，「生徒一人一人の生命を守れるくらいの医学の力をつけておきたい」と意欲を示す。一方で，「もしそれでも救えないときは悲しいだろうが，何も手を尽くせないで救えないよりは，少しでも持っている医学の力を信じて努力した結果，救えなかったほうがましだ。突発的な事故にも対応できるように，大学四年間でしっかりと医学を学び，『生徒一人一人を守っていける』という自信をもって働きたい」という不安と希望，勇気の入り交じったような考えを示す者もいた。

これらは今回の調査では数としては少なかったが，いずれも使命感に燃えた純朴な発想であると思われる。また，医師や医学に対する社会的偏見や主観的な増悪，あるいは妙なコンプレックス等も見られず，若者らしく清々しく純粋な内容であった。このような立場を保持して，将来も養護教諭の任務，例えば「学校と病院をつなぐ『パイプ役』としての職能」を遂行するのであれば，学校医や病院側の協力も得やすく，その「コーデイネーター的」な職責もまっとうされやすいのではないかと思われる。

表2　医学に対する考え方

項　　目	医学に対する考え方
幅広い正確な知識・該博な医学の知識と技術(内科的外科的)	9(25.0%)
あらゆる科(内科・外科・精神科等)にわたる学内「専門医師」	1(2.77%)
「免許皆伝」を要する科目・医学の一番のエキスパート	1(2.77%)
他教師とは異なる知識，治療に必要	3(8.33%)
子供たちの心の悩みが自分の心に届くような広さや知識の心の豊かさの基礎	1(2.77%)
看護職の根本にある学問	2(5.55%)
生徒から頼りにされるために。	2(5.55%)
技術はもちろん医療の倫理も	2(5.55%)
学べるだけ学んでおけば後で役立つ学問	1(2.77%)

自分が医学を学べるなんて，また現に学んでいるなんて信じられない。（同時に不安）。期待と不安	1(2.77%)
身体な処置に加えて心理的な対応もできる	2(5.55%)
救急車が来るまでの生死を分ける適切な対応。緊急時対応。的確な処置やアドバイス（傷病の手当てや予防法）	8(22.2%)
医学はとても広い内容をもった多面的な分野	3(8.33%)
自分自身も人間として成長できるように，医学の様々な分野をしっかりと学ぶべき。自分の成長の糧	2(5.55%)
あらためて生命を守ることに対する責任の重大さを感じ取ることができる	3(8.33%)
中途半端な知識で生徒に接するのは危険。完璧さの要求	2(5.55%)
すべては無理だと思うが，なるだけ多くの基礎的なことは必ず身につけたい。基礎的重要事項の修得	2(5.55%)
予防教育も必要	2(5.55%)
医学を通した様々な経験も大切。医療経験	1(2.77%)
どう看護を結びつけていくか，自分の課題として考え続けるときに不可欠。看護との関連性	1(2.77%)
カウンセラーの立場では必ず必要で，それを学ぶ基礎にもなる	2(5.55%)
医学の必要性を強く感じる。必要性強調	1(2.77%)
保健室に来る生徒の不安，身体と心の両面から楽にする欲求に答えられる。拒食症や不登校（保健室登校）など心身症の知識	2(5.55%)

単位：人(%)

本調査の結果，本コース学生のごく一般的な考え方として，「医学は自分たちの職務のみならず生活に深く関わっている。子供の命や健康状態が養護教諭の力量に関わってくるのであるからしっかりと医学を理解していなければならない。さらには予防医学も大切であって，養護教諭の存在の基盤となる医学をきちんと学びたい」といった内容のあることが理解された。

3．「養護教育」と「医学」の関係

表3は「養護教育と医学の関係」についての結果である。

最も回答の多かった項目は，「養護教諭になるため最も修得を要する学問・最重要科目・養護教諭という職業に直結し，またつながる学問」という内容のもので，10名(27.7%)を占めた。

次に多かったのは，「最も密接な関係・深い結びつき」で，9名（25.0%）を占めていた。また，「養護教諭に一番必要な学問・職務を貫徹するのに必要不可欠」というものも，8名（22.2%）にみられた。以下順不同で，次のような内容がみられた。

「養護教育の土台となる学問･必須要件」という内容も6名（16.6%）にみられ，内容的に同等の先述の「養護教諭になるため最も修得を要する学問・最重要科目…」と併せると，16名（44.4%）になり，さらに類似の「最も密接な関係・深い結びつき」および「職務を貫徹するのに必要不可欠」までを含めて考えると，33名（91.6%）に達する。

これらの立場では，養護教諭は「学校という場で子供の健康を管理し，内面の成長を助ける役割を果たす」と慎重に定義し，「保健室という場は『小さな病院』とも言うべきところ」と考える。「一般の病院には医者がいて患者の病気を治療するが，養護教諭は病気の予防と精神的看護ができるはず」であり，したがって「医学を学び身につけることは当然」であると考える。

この考え方のタイプで重要な点は，「児童生徒も保健室の先生が医学を身につけているからこそ頼りにするのではないか」とする存在意義論である。換言すればアイデンティティをその「医学的専門性」に見出そうとする考え方である。この種の立場の結論は，ほとんどすべて，医学は「養護教諭の大前提となる科目」であるとするものである。そしてこの立場を貫徹すると，児童生徒のみならず「教職員」も，養護教諭を「医学のスペシャリスト」とみなしていると，案外冷静な判断を下せることになる。

養護教諭と医学はたいへん密接な関係であり，医者のような存在になって病気やケガの手当てをするのみでなく，学校と病院をつなぐ役割（連絡通路），いわば「パイプ役」としての職能・職責も重要であると考える。そのため医学の勉学は欠かせないと結ぶ。

さて，養護教諭は，学校の中で児童や教職員の心身の健康に携わる最前線に立つことに異論を挟む者は少ないと思われる。的確な処置や判断，あるいはアドバイスが求められるが，それらは「正しい医学的知識がないと無理」と多くの学生が認識していると理解された。彼らはそのためにも，「医学をよく学び理解する必要がある」と考えるのである。医師ではないので直接に治療を施したり薬を処方することはできないが，児童や教職員と病院の医師や看護婦の間に立ち，双方の立場を考え，どちらともうまくコミュニケーションをとらねばならない。医学医療の基本的な部分を知り，「それを自分のものとして吸収することは，養護教諭になる必須条件であり，日頃から，医学や健康に関する情報に敏感に反応し，常に自分や他者の心身の状況に興味を持ちどうしたら幸せに生きていけるかを考えていかねばならない」と考える。

養護教諭は，小学校から高等学校の生徒に対して「親しみを感じさせる人」である必要がある。「生徒の心理を読み取ることができ，適切な処置のできる人というイメージ」がある。そこに，「医学の必要性を強く感じる」と言うのである。生徒にとって「一番身近な医療の場は，学校の保健室」であり，「病院よりも行きやすく，どんな相談でもできる場所」であると言う。多少，個人的経験からの発想や独断の嫌いもあるが，十分理解できる範囲である。

「看護の立場あるいはカウンセラーの立場に立つときは，必ず医学の知識が必要とされる。専門的医学ではなく，児童の健康に関わる医学の知識は最低必要。相談を受けたときの医学的見解に加え，医学に対する自分自身の考えを伝えていかねばならない。養護教諭になって，子供の健康管理を任せられたとき，医学の知識こそ大いに活用される学問である」のように考える者も数名いた。

理想の養護教諭像は，「ケガや病気の治療などの医学看護的な面で，適切な治療（対応）をし，生徒からまず信頼される教師」である，と考える。「身体的な面で信頼されて初めて，生徒が抱えている心の悩みなども話してもらえ，一緒になって考えてあげることができる」と思うわけである。養護教諭は，学校の中で「生徒や職員すべて」の健康を管理する「プロフェッショナル」である。したがって，生徒の悩みに耳を傾けるのはどの教師でもできるが，医学的処置を行うのは養護教諭が唯一の存在である。人間が生活する上で「最も大切なものは心身の健康である」から，「学校で生活するすべての人の健康を第一に考え，行動がとれる」養護教諭になりたいと言う。

同様の意見に，「医学的知識は必ず必要なもの。学校集団の中で児童生徒の命を守るのは教師の役目だが，中でも医学的知識を持つ者は養護教諭だけ。立場としては，生徒に教える教師というより，医師や看護婦に近いはず。保健室に来る児童生徒は内科外科の区別無く来るので，医学の知識を幅広く学ばねばならない」というのもある。いずれも，純粋なる正論であろう。

さて，養護教諭という職業は「非常に医学に触れる機会が多いもの」である。例えば，「生徒がケガをしたときや具合が悪いとき，どのように対処するかは，しっかりと医学を学んでいないと適切に行えない」であろう。「生徒は自分の身体の小さな異変に気がついたとき，病院の医師より養護教諭に聞く方が多い」ので，そのときに正常な発達過程上の問題か，医師に相談すべきかの判断は，養護教諭にとって重要な役割であって」，ここに迅速で正しい「医学的知識が要求され」，「医学的なことを生徒にわかるように説明する必要」がある。できれば，「健康に対し興味を持ってもらい，そこから自分の生について考えさせたい」と，人間教育的発想を明言する者もいる。つまり，現在は「精神面では幼い子供でさえもストレスを認識できる時代」であり，「生徒の不安を取り除けるような」養護教諭になりたいと考えて，まことに殊勝であろう。「医学はとても広い内容をもった分野だが，そのすべてが養護教諭にとって児童に接するときの基礎になるだろう。自分自身も人間として成長できるように，様々なことを学び，医学をしっかりと学んでいきたい」と，また謙虚でもある。

養護教諭と医学は「切っても切れない関係」にある。養護教諭は「学校のお医者さん」であるから，「生徒全員や他の教員の命を預かっている」と言っても過言ではない。「何かの本で『医学知識は知っていれば知っているほど役立つ。学生のうちに，その知識を学べるだけ学んでおけば後で慌てることも少ない』と書かれていたのを思い出す。自分が医学を学べるなんて，また学んでいるなんて，と考えると嬉しいと同時に，非常に不安になってくる。でも養護教諭には，一番必要な学問であると確信し，頑張っていきたい。なるべくたくさんの医学知識を身につけたい。すべては無理だと思うが，基礎的なことは必ず身につけたい」と，大学に入ってすぐに「医学」という新しい学問に接し，学べる期待に胸を躍らせながらも，その困難性を思うと不安になると率直な感覚を表現している。

また，ある者は「イメージの中の養護教諭は，生徒の相談にのってくれる優しい人。心の悩みを相談できるカウンセラーと考えたが，医学分野における責任も重大。高い医学知識を有することが要求される。多くの生徒の健康を預かる立場として，内科的外科的，その他様々な医学知識が必要。学校においては看護婦のように，傷の手当をしたり，医者のように症状にあった薬を出したりするので，医学を充分学ぶべきだ。それによって将来，自信をもって生徒の健康を預かることができる。医者のように病気の治療はできないが，子供にとっては最も身近な医学を知る存在として役立つの

ではないか」と，冷静である。

「医学を学ぶことは養護教師になるためにとても大切なこと。児童生徒が学校生活をいかに健康で楽しくおくっていくか，それを支える医学について学び，それにどう看護を結びつけていくか，自分の課題として考え続けていきたい。人を看護するという職に就くには，その根本にある医学という学問について充分知っておかねばならない」と謙虚であって，優れた発想であると思われる。

「学校には医師はいない。したがって，児童が学校で発病した場合，処置し対応にあたるのは養護教師。的確な判断・治療が必要になってくる。よって養護教師と医学とは密接な関係がある。養護教師は学校で唯一医学を学んでいる人間。養護教諭は教師に属するが，医学をしっかりと学び，生徒から頼りにされる養護教師になりたい」。これと同様の意見に次のようなものがある。興味ある意見を二，三ピックアップすると，「養護教諭は学校の中で児童の健康を担う役割があるため医学の知識はとても必要。自分も高校生の頃，保健室でよく相談にのってもらった。医学の正しい知識がないと人命に関わる。救急の場面でも，医療側に傷病発生の状況等を正確に伝える必要がある。学校の中に病院はない。したがって養護教諭が生徒全員の健康に気を配ってその役割を果たしていかねばならないだろう。あらゆる領域の医学について，幅広い知識を身につけていきたい」，「養護教諭は児童や教職員の身体や心をサポートする存在。医学面でも身体な処置に加えて心理的な対応ができることが必要。そのために医学と関わることは大きい。緊急を要することもあり，その対応も重要」，「医学という人間の身体に関する専門的知識をもっていることは重要。医学を十分に学ぶことによって，養護教諭としての仕事に幅をもたらすことができるはず。すなわち，身体的に病む人，精神的に病む人の双方に対して，十分対応できるようにするため，幅広く医学を理解することが必要」などである。

「保健室は『心のオアシス』と言われるが，心理的ケアだけでなく，当然医学的処置も必要になる。心と体の両面から問題解決が必要。容易なことでないことはわかっているががんばろう。養護と医学は共通点が多く，これが養護教諭になろうと思ったきっかけ。様々な子供たちの心の悩みが声となって自分の心に届くような心の広さや知識の豊かさが必要。医療技術はもちろん医療の倫理等を学ぶことで自分の成長に役立てたい」と，臨床心理的側面を重視しつつ，心身両面からの問題解決の必要性を強調する意見もみられた。

表３　養護教育と医学の関係

項　　目	養護教育と医学の関係
養護教育の土台となる学問・養護教諭の大前提となる科目・養護教諭になる必須要件	6(16.6%)
養護教諭の力量として子供の命や健康に関わってくる。自分の日常生活にも関連（子供の命に関わる養護教諭の力量）	3(8.3%)
そのすべてが養護教諭にとって児童に接するときの基礎	1(2.7%)
最も密接な関係・深い結びつき	9(25.0%)

養護教諭になるため最も修得を要する学問・最重要科目・養護教諭という職業に直結し，またつながる学問	10(27.7%)
養護教諭に一番必要な学問・職務貫徹に必要不可欠	8(22.2%)
養護学と共通点が多い学科	2(5.5%)
養護教諭は保健室に常駐し医学と絶えず関わる	2(5.5%)
養護教諭としての仕事と人間に幅をもたらす(人を扱う医学に日常的に接することで)	3(8.3%)

単位：人(%)

おわりに

少子高齢化の昨今，長男長女に代表される児童生徒に対して両親の期待の大きさ，子供を取り巻く種々のストレスあるいは運動不足等からくる肥満や運動神経の未熟等の背景下で，まさにこれから養護教育課程に入ろうとする養護教師志望者の医学教育に対する意識も強まり，多様性を帯び，ときに過大になっていく傾向が示された。

４年後には社会に巣立っていく（専門職に就く）意識から，本コースは医学部の学生と似て「専門意識」がとりわけ強い傾向が窺われた。それは90％以上が養護教諭の道に進むという進路先志望にも表れている。その意識に拍車をかけるように，近年のマスコミによる青少年の事件や犯罪報道を察知し，それらに対し鋭敏に反応あるいは影響を受ける学生も多い印象をもった。

また，大規模校への複数配置や保健授業の担当等，周囲の養護教師とや養護教育に期待するものも多くなっている。その反面，養護教師やその志望者，あるいは養護教育に携わる側からの「養護教師の特質」や「本質」は何かといった議論も増加している。今回の調査においても，新入生の段階からそのような議論に入り込み，また堂々と持論を展開する学生もみられ驚いている。

このように養護教育課程における医学教育の在り方に関する内容は，古くて新しい課題であるが，時代や社会情勢の変化による学生の意識と養護教育に期待あるいは要求されている内容の変革を考慮しながら，自らも変化していかねばならないものと思われる。

筆者がこの調査を通じて感じたこと中で最も印象に残ったものは，養護教諭養成課程のなかで「医学」を受講すべき新入生たちの純粋な向学心と使命感の大きさを知り得たことであった。今後ともこの種の調査を継続して行いたいと考えている。

文　献

１．小倉　学．1970．『養護教諭』（東山書房）
２．廣田理絵．1999．「養護教諭の生活世界と「養護」の本質」『茨城大学大学院教育学研究科1999年度修士論文』1-74.